

春闘と三池のたたかい

私たちは、すでに「春闘段階をめざす反撃の総路線」についての方針を討議中です。

しかし、いよいよ新年をむかえたこの時期に、そのあらましを、さらに総括しておきます。

反撃の総路線について

春闘の意義をつかもう

うちの会社とか、うちの公社とかだけを相手に「大幅賃上げ」をたたかおう、という思想は、いわゆる企業意識丸出しの危険性をもたないだろうか。

なるほど、直接の雇用主とか企業責任者との交渉と闘争を抜きにして、労働者の賃上げは決まらな

い。しかし、いまや各企業・各公社とも、いよいよ日経連や政府の強い統制下で動かざるをえなくな

っているが、それは個別資本としては激化する企業競争に勝つため

に「賃金」を切り下げたい。一方、反動政府は「権利に目ざめ

・平和を要求する国民の決起」を何とか抑圧しないと「革新派」に

敗北するため、せじじめれば資本主義を維持するために独占資本

と反動政府が手を結び力を合わせた政策で「統制」するからである

このような資本と政治権力の結合・一体化が、国家独占資本主義と呼ばれている体制である。

アメリカの反共政策と日本独占の合理化進行政策が「安保と三池」で結合し、反対闘争の先頭に立つた国民とて労働者を弾圧した事実が、これを証明した。

したがって「春闘」は、個々の企業・公社に勤務する労働者の賃上げという経済要求を中心とするが、相手が統一して来る以上、もはや各企業・各公社との交渉・斗争だけでは不十分で、味方も労働者階級として統一斗争を組まなければならないことを意味しているわけである。

配者の不当とて「労働者がどれほど死んでもかまわない」という資本の冷酷な合理化攻撃に反対し抵抗するたたかいを含めて、合理的で労働強化や賃上げと共に命が危し、健康も守られず、物価値上げや社会保険の改悪などせいかくの「賃上げ」がふつとでしめようかもしない、という実態があるからだ。

このように、春闘は多面的な意義を内包した鋭い「階級斗争」なのである。

しかし第二組合の幹部だけは「合理化と生産性向上に賛成し協

力しているのだから、賃上げはたかならないで取れる」という議論を第二組合員諸君に押しつけ、自からの矛盾をかくし切れなくなっているのに、反制の力をかりて第二組合員諸君の当然な要求を抑圧し、会社に奉仕している。

こんど期末手当で、事実上四万円要求で足を引っぱった第二組合幹部の裏切り行為が、第二組合員からも「不満」として波及されているのは周知のとおりである。

日本中の労働者が、総決起すべき「春闘」の意義を再確認し、第二組合員諸君にも呼びかけよう。

三池としての春闘路線

(1)三井鉱山のあらゆる不当の追及
(2)命を守る負傷ゼロ運動の徹底
(3)ガス中毒患者と遺族を守る
(4)第一組合員対策をふかめる
(5)荒尾市長選挙に勝利する

私たちは、この各項を中心とする諸要求と斗争推進を決定しているが、「大幅賃上げ」と「反合理化斗争」が、あくまで春闘の統一目標であることを銘記して現場からたたかおう。

三井鉱山の不当追及
三十九年上期の二四〇万トン計画に対し三四万トン(二五%)の出産減が大問題となっている。ついで三十九年下期の二五五万トン計画が、予定どおり出産で

あるかどうか大問題となっている。不当労働行為である「差別」「切り崩し」をあくまで強行し、五月いらいすでに十一名の殉職を出しながら保安闘争をサボり、第二組合加盟を条件とする組員六百数十名の直轄鉱員採用という不当な

命懸けをへ返すことではできない。抵抗なくして安全な」というスローガンの実践は炭鉱の封建的な支配を打破する力となるものであり、人間としてのギリギリの主張であり、無抵抗を強制されている第二組合員諸君にも勇気を与える契機ともなる。

この春闘で――
差別・切り崩し、回交拒否など一切の不当労働行為を、一つひとつ吟味してみんなで提訴すること、まず第一であるが、それは地労委に「助けてくれ」ということでもなく、正しい者が権利として要求したたかという構えであり、一月二日に福岡地労委に対する第一次分をすでに提訴した。

たたかいを広げよう

三井鉱山の不当追及は、企業内斗争に終るべきものではない。「労働者がどれほど死んでもかまわない 合理化強行」は、なにも三池炭鉱だけに限らないからである。

「差別・分裂攻撃・労組組合無視」も合理化攻撃の一かんとして

健康保険法改悪阻止 社会保障確立のたたかい

いま問題になっている医療費の緊急値上げなど、健康保険法の改悪をはじめ、厚生年金・失業保険・労災法・日雇健康・失対法等々の改悪にみまわり、佐藤内閣は「社会保障関係法」の大幅改悪を目指して、法案整備を急いでいる。

また医療費については、国民生活の上から問題となる中央医療協会の答申した八五アップをさらに無視し、自民党の医師出身議員団の圧力に屈した神田厚相は、九・五

一階級支配の強化であり、新産都市促進にみまわり住民の真の利益をみまわらざる暴政であり、国民のすべてが望んでいる「平和と独立」を弾圧するものである。

労働組合運動としては、まず反合理化抵抗斗争を通じて、さらにこのような反動諸政策に反対する力を強めなければならない。

新年早々に、荒尾市長選挙があり、総評主催「分業問題研究会」があり、さらに「労働大学三池」が、さらに二〇〇名以上の三池来山(二泊三日)が決定されている。

この春闘で有効な一撃を三井鉱山にたたきこむことは、このような「たたかひの拡大」が基礎であり、一九七〇年(昭和四五年)の第三次安保斗争を展望する一大国民斗争の強化にもつながる。

組織された労働者階級の歴史的任務というものは、このような正しい基礎を貫徹することによってのみ達成されるものである。

春闘は、このような意義をもち三池労働者は、抵抗斗争の成果を確認しつつ、さらに五人組の強化に全力をつくすことを当面の組織方針としているわけである。

中毒患者に暖い贈物
「ソビエトより薬品届く」
去る八月から九月にかけて、三池労働者五名が約一カ月間にわたって連日炭鉱労働組合の招きにより治療を受け帰国したが、そのさい連日炭鉱労働組合中央評議会は「中毒患者に治療薬とビタミン剤を送る」ことを約束した。その薬品一〇〇キロが去る二月一四日に届けられた。



三池労組に届いたソビエトよりの薬品